

氏 名	もり 森 香 奈 絵
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 349 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	「不定名詞句の意味論——英語・フランス語を対象とした多様な意味解釈の統 一的分析——」
論文調査委員	(主 査) 教 授 東 郷 雄 二 教 授 山 梨 正 明 教 授 大 木 充

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は英語・フランス語を対象として、特定解釈・非特定解釈・存在解釈・総称解釈といった多様な意味解釈を持つ不定名詞句に、形式意味論を用いて統一的分析を試みたものである。

第一章の序論では、不定名詞句の意味解釈を扱うために状況意味論を採用し、文脈に対応する最大の状況 w 、個体に対応する状況 i 、出来事の状況 e の三つの評価状況を設定する必要性の概略を述べている。

第二章では、従来から盛んに議論されてきた不定名詞句の特定性 (specificity) という概念を批判的に検討し、作用域関係で特定性の問題を扱おうとすると問題が生じることを指摘している。作用域関係で解釈された特定性の意味そのものが明確でないこと、三つ以上の作用域が関係する中間的作用域解釈をうまく扱えないことなどがなかでも大きな難点である。これを踏まえて本論文では、特定性を「談話内に新たに対象の存在を述べる場合に、当該の文の述語で表される関係とは無関係に、既存の談話領域内に含まれる何らかの要素との特定の関係を経由することを表す」と定義することを提案している。このように先行文脈とのリンクによって特定性を捉えようとする研究に Kratzer らの選択関数による分析がある。しかし、Kratzer は不定名詞句に特定・非特定の多義性を認めており、もし多義性を認めずに統一的分析が可能ならばその方が望ましい。また Heusinger は指標つきエプシロンを用いた分析を提案したが、この方法では結局は特定解釈しか捉えられないという不備がある。

以上の考察を踏まえて本論文では、評価状況を世界 w (world)、個体 i (individual)、出来事 e (eventuality) の三層構造として設定することを提案している。この三つは $w > i > e$ の関係にある。このうち i とは e が個体の単位に集まった一つの状況である。特定解釈とは名詞述語の評価状況が i の場合、非特定解釈は評価状況がそれ以外の場合 (w , e) と規定することで一貫した分析をすることができる。既存の談話領域の個体状況 i_k と i とが特定の関係にあることを $R(i_k, i)$ と表現すると、John knows a good restaurant. の特定解釈は $\exists y, i [R(i_k, i) \ \& \ \text{good-restaurant}(y, i) \ \& \ \text{know}(j_{ij}, y, i)]$ と表すことができる。 w と e と並んで、個体状況 i を導入した点が本論文の分析の新しい点である。

第三章では、Most linguists have looked at every analysis that solves some problem. のように、演算子が三つある場合に生じる中間的作用域解釈、すなわち $\text{most} > \text{some} > \text{every}$ の関係に立つ「ほとんどの言語学者が、それぞれある問題について、それを解決する分析をすべて見た」という解釈を扱っている。この解釈においては演算子 some が島の制約を破って every よりも広い作用域を取ることをどのように説明するかが問題であった。従来この問題については、不定名詞句は指示的解釈と量化的解釈のあいだで多義的であり、指示的解釈の時には自由に広い作用域を取るとする説と、選択関数を用いた自由作用域解釈とが対立していた。本論文では特定性を第二章で提案したように定義し、不定名詞句の表す対象が最大作用域を取る名詞句の表す対象と特定の関係を結ぶことを表す関数 $R(i_k, i)$ を導入することによって、不定名詞句が一見すると島の制約を破って中間的作用域解釈を受けることが説明できることを示している。

第四章では主語位置における不定名詞句の意味解釈の問題を扱っている。本論文の提案より、存在解釈は評価状況が e の

場合にのみ得られ、否定文では出来事が起こらないことが述べられるため、否定文では主語位置での不定名詞句に存在解釈がなく、特定解釈のみがあることが予測される。実際 *A man didn't come.* では特定解釈だけが可能であり、予測が正しいことがわかる。また非可算的名詞句は評価状況として *i* を持つことがないという仮説を提案し、ここから非可算的名詞句に特定解釈が存在しないことを導くことができるとしている。実際 *Water is rotten.* では裸の非可算名詞 *water* について特定解釈は存在せず、その場にある水のほとんどすべてという擬似総称解釈しかないことがわかる。

第五章では不定名詞句の総称解釈を扱っている。*A madrigal is polyphonic.* のような不定名詞句主語の総称文は、*polyphonic* のような本質的述語しか許容せず、?? *A madrigal is popular.* のように実質的属性を許容しない。また *A dog has four legs.* では事故に遭って足が三本になった犬のような例外的個体の存在を許容することが知られている。本章ではこのような不定名詞句総称文の評価状況を *w* とすることを提案している。*w* で成り立つ述語は *w* に含まれるすべての状況・すべての個体について成り立つ本質的述語であり、実質的属性を表す述語とは無関係に成り立つこと Kratzer の提案した *lumping* 関係を用いて明らかにしている。

このように本論文は、従来から問題の多かった不定名詞句の多様な意味解釈に、状況意味論に基づいた世界 *w* ・個体 *i* ・出来事 *e* という三層構造の評価状況を設定することにより、特定解釈・非特定解釈・存在解釈・総称解釈といったさまざまな意味解釈を、名詞句そのものに多義性を認めることなく自然に導くことができることを明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は言語学の中の意味論に属する名詞句の意味解釈の問題を扱っており、また手法としては形式意味論を用いている。従来から *John wants to buy a car.* の不定名詞句 *a car* は特定解釈と非特定解釈のあいだで多義的であると言われており、また *A man is mortal.* のように不定名詞句には多くの制約のもとにはあるが総称解釈も存在する。不定名詞句に根源的多義性を認めるのか、それとも不定名詞句の意味は一つで多義性は意味解釈の過程における様々な要因の干渉によって生じるとするのは、意味論の中でも意見の分かれる問題である。特に Fodor & Sag (1982) において不定名詞句が島の制約を破る現象が指摘されて以来、不定名詞句の意味解釈は意味論において議論の集中する問題となってきた。本論文はこの不定名詞句の意味解釈の問題に正面から取り組み、新たな提案を付け加えることで従来は整合的に説明できなかった問題を扱えることを明らかにしている。

本論文では状況意味論の枠組みを援用し、文全体の意味解釈とは別に、文中に含まれた不定名詞句も意味解釈に当たって独自の状況を必要とするという立場を採用している。これは不定名詞句の特定性を扱う場合に、作用域関係のみに頼った分析では三つの演算子が関係するときに生じる中間作用域解釈をうまく扱うことができないといった、今までの方法論への批判的反省に基づいたものである。

本論文の提案の独自性は、文が置かれた文脈に対応する最大領域 *w* と、出来事が生じた局所的状況 *e* の中間的状況として、個体に対応する状況 *i* を設定した点にある。これは Carlson の提案した類 *kind*、個体 *object*、局面 *stage* という意味論的存在論において、局面を統合した存在としての個体 *object* という概念にヒントを得たものである。その上で特定性を「談話内に新たに対象の存在を述べる場合に、当該の文の述語で表される関係とは無関係に、既存の談話領域内に含まれる何らかの要素との特定の関係を経由することを表す」と定義している。さらに不定名詞句の特定解釈は評価状況が *i* の場合であり、非特定解釈は評価状況が *w* が *e* の場合に限られると仮定することで、不定名詞句そのものに多義性を認めることなく、特定解釈と非特定解釈のちがいを捉えることができると主張している。既存の談話領域の個体状況 i_k と *i* とが特定の関係にあることを $R(i_k, i)$ と表現すると、*John knows a good restaurant.* の特定解釈は $\exists y, i [R(i_k, i) \ \& \ \text{good-restaurant}(y, i) \ \& \ \text{know}(j_{ij}, y, i)]$ 、非特定解釈は $\exists y [\text{good-restaurant}(y, w_0) \ \& \ \text{know}(j_{ij}, y, i)]$ と表すことができる。デフォルトで i_k を i_0 、すなわち主語 *John* の個体状況と置くと、前者は *John* と特定の関係にあるレストラン (ex. 食事をしたことがある, etc.)、後者は *John* と特定の関係にはないあるレストランという解釈になる。このように個体状況との特定の関係という関数を用いることにより、作用域関係でははっきりしなかった不定名詞句の特定性の表すものをより明確にできること、また演算子が三つ関係する場合の中間的作用域解釈が無理な設定なしに扱えること、また *Everyone reported that Max and some lady disappeared.* で *some > everyone* という作用域関係が可能であり、不定名詞句が例外的

に鳥の制約を破る例を説明できることなどの利点を得られることを、本論文は緻密な論理構築によって示している。

本論文が目指した課題は、不定名詞句に本来的多義性を認めることなく、特定解釈・非特定解釈・存在解釈・総称解釈などのさまざまな解釈を無理なく導く装置を組み上げることであるが、主語位置の不定名詞句にかかる厳しい制約もまた説明できることを示すことで、その理論的装置の有効性を実証できるとしている。主語位置の不定名詞句には、述語として *A man is {drunk/*intelligent}* のように局面レベル述語しか許容せず、また否定された?? *A man was not drunk.* は存在解釈では許容されないという制約があることが知られている。本論文では存在解釈は *e* を評価状況とするときに得られると仮定することにより、この制約をうまく説明することができ、かつ否定文の主語位置不定名詞句には特定解釈しかないことも示すことができるとしている。これは本論文の出発点となる仮説である $w > i > e$ という三層構造の評価状況から自然に導くことができる結論であり、何ら特別な装置を付加する必要がないという点において評価することができる。

また不定名詞句主語の総称文では、*A madrigal is {polyphonic/? ? popular}* の示すように、主語にとって本質的属性を表す述語しか許容せず、実質的属性を表す述語は許容されないという事実が指摘されてきた。本論文では総称文における不定名詞句主語の評価状況は *w* であり、*w* において成り立つ命題は *w* に含まれるすべての状況、すべての個体について成り立つとし、実質的属性は *w* の部分状況である *i* で成り立つとすることによって、述語の容認度の差を表すことができ、かつ総称文の例外となる個体の存在をも容認すると主張している。この提案は興味深いものではあるが、総称文についてはこれ以外にも多くの特異な性質があることが知られており、本論文の提案する状況意味論に基づく形式的な処理が総称文の特異性をどこまで解明できるのかという点については若干の疑念が残ることも事実である。

以上述べたように、本論文は不定名詞句の多義的解釈を生み出すメカニズムという近年の意味論でもっともよく議論されたテーマのひとつに正面から挑み、三層構造の評価状況という概念を提案することによって、従来は散発的に捉えられてきた諸問題に統一的分析を与えることができることを示した点において高く評価することができる。

また、本学位申請論文は、人間と人間を取り巻く環境の認識・把握の様態研究をめざして創設された人間・環境学専攻環境情報認知論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年12月11日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。